

● 星 座 漫 筆 ●

黃 道 光 の 象 徴

— 野 尻 抱 影 —

この頃佛蘭西の埃及學者モレエ氏の「ナイル河と埃及文明」を讀んでゐると、ピラミッドが大犬座のシリウス及び黃道光の象徴であるといふ説に逢着した。シリウスは、埃及ではナイルの氾濫を豫報して曉天に昇つたので、女神ソテイス、時にイシスとして崇められてゐたことは、「科學畫報」へも書いたことがある。又これがピラミッドに象徴されたことも事實で、象形文字の△は屢々シリウスに用ひられてゐた。しかし黃道光がピラミッドの象徴でもあつたことは初耳で、ひどく興を牽かれたのである。

ピラミッドは元來が太陽の昇天に象どつたもので、その關係から、太陽に先んじたシリウスや、熱帶地方では毎日のやうに日没後と日出前とに現れるといふ黃道光をも之れに結びつけたに相違ない。が、僕は更に進んで、ピラミッドの形そのものに黃道光の形を見たのではなからうかと考へる。何しろ高さ 100° にも及ぶといふ、そして勿論素晴しく鮮かに相違なからう黃道光である。それに、ピラミッドが普通、鏡のやうに磨き上げた石灰石で被覆してあり、埃及で「光」と呼んでゐたことをも考へに入ると、これは餘り無理な想像ではなさ相である。

これと併せて思ひ出すのはアラビヤ人乃至ベルシャ人の言ふ「伴りの黎明」のことである。この事は小著「星座巡禮」——つまらぬ本であるが——でも、ちよつと言及して置いた。ベルシャでは、眞の黎明をスビー・サーデイーク (Subhi Sadhik) といひ、これに對して伴りの黎明をスビー・カーザブ (Subi Khazab) といつてゐる相である。文献としては、ベルシャの天文詩人オーマル・カーイヤームの「ルバーイヤート」を、英國のフィッツジェラルドが自由譯したものゝ第二聯に、

『伴りの黎明の幻消えざる先に、

酒場の裡より呼ばゝる聲を聞きぬ』といふ二行がある。

フィッツジェラルドは之れを“False Morning”と譯してゐるが、最初の譯では“Dawn's Left Hand” (黎明の左手) となつてゐる。この方が原文の倂をそのまゝ傳へたらしい。そして、普通には眞の黎明の前約一時間 にわたり地平線上に光の柱 (Shaft or Column) の立つものと註されてゐるが、僕は、何かの本でも讀んだ説と、及び、「黎明の手」に喩へられてゐる事實とから、これをも黃道光と判斷したのである。そして此の考證を、特に我が黃道課の諸君に捧げさせて戴く。